ペトロワの『レキシコン』研究について（後）

江　口　泰　生

『レキシコン』は非常にサイズが小さいが、完成している。その原稿は51枚、102ページで構成されている。『レキシコン』は、ロシアのアルファベット順に配置され、ａからяまですべての文字を含んでいる。文字ю とэで始まる語彙は編集されておらず、18世紀教会語で用いられるヤチで始まる単語はｅで始まるものと一緒にまとめられている。またそのほか、文字ш とщが一緒にまとめられていて、以上は『レキシコン』には単語が含まれていない。会話例文が１つのセクションをなしている[i]。したがって、編集はロシア語の辞書アルファベットが25文字に減少している[ii]。辞書の各ページは、まず左端がロシア語原語、中央にロシアの文字で転写された日本語、右側に平仮名で書かれた日本語の３つの列に分かれている。『レキシコン』の日本語部分は､筆ではなくロシア語と同じインクを使って羽ペンで書かれた。そして日本語は後から書かれたと思われる。これは、『レキシコン』の２つの列より、第三列目はよりインクが薄いという事実から明らかである。また、『レキシコン』内の単語のなかには、ロシア語の転写のみがあり、日本の文字が記録されてないものもあることも根拠である。またおそらく辞書の編集者は数字などの低学年レベルの漢字を除いて、漢字の書き方を知らなかった。おそらく、編集者は「月」「日」「文」「人」（人間を数える機能語）、数字以外の漢字の書き方を知らなかった。タタリノフは補助資料や参考にできるものがなかったので、多くの困難な作業を行っている。常に一致しているわけではないので、編集者にはロシア語単語と日本語単語の同等のものを選択して提示することに大きな困難があった。時として不正確な記述的な翻訳を与えたり、ロシア語と日本語の単語の値としては適切ではなかったりする。しかし、当時の一般的な辞書に偉大な仕事をなしとげた。A.タタリノフは多かれ少なかれ誤解や不正確さを排除して、ロシアの単語を翻訳した。ほかにも彼が直接に犯した間違いの数は比較的少ないが、これらは後述する。

『レキシコン』には977の単語が含まれている、翻訳せずに残されたいくつかのロシア語などがあり、日本語の単語はやや少ない。しかし、辞書の付録をあわせると、千以上の言葉が含まれている。恐らく編纂者はイルクーツク日本語学校で養成されていた翻訳者に必要な用語集を編纂しようとした。よって『レキシコン』は、家庭で用いる語彙や海洋用語を反映している。つまりロシアが千島諸島で出会ったり、ロシア海域に漂流して出会った日本人との接触のために必要な日常の語彙である。

『レキシコン』には軍事用語がほとんどない。「レクシコン|の末尾の付録資料として会話集もあって、述べている表現の中には「戦争は有害である。平和はあなたにとって有利である（Война будет вредна. Мир есть Вам благо приятный)」という例文もあった[iii]。オランダの幕府への警告に反

して、ロシアが日本に向けて全く敵対的意図を持っておらず、むしろ逆に、日本人との個人的な接触のための必要性を感じていて、前述の言葉はロシア人の親しみやすさについて言いたいことの証拠である。

表紙のあとには、45枚が小辞書・熟語、それに接続されて「日本語の会話の一部（Некоторая часть японского разговора）」、「日本のイロハの転写（Азбука японская с переводом）」、同じ49枚目裏側に「その他もろもろ（Счет различным вещам с переводом российским）」、続いて50枚目に「数字」、「100000までの数え方（Счет простого счисления до 100000）」、50枚目裏に「10000までのお金の数え方」、51枚目は「荷物の数え方」「人間の数え方」となっている。

『レキシコン』で日本語の単語のロシア転写の分析に進む前に、49枚目の日本のアルファベット「いろは」の転写に焦点を当ててみると、A.タタリノフの転写は現代ロシア語表記[iv]では次のように表される。

いй	ろро	はфа	にни	ほфо	へфе	とто
ちчи	りри	ぬну	るру	を（во）	わва	かка
よйо	たта	れре	そсо	つцу	ねне	なна
らра	むму	うм	ゐи	のно	おо	くку
やя	まма	けке	ふфу	こко	江е	てте
あа	さса	きки	ゆю	めме	みми	しши
ゑэ	ひфя	もмо	せше	すсу		

ひらがなで書かれた日本語の音節の転写では、文字イについて、ア行の「い」とワ行行の「ゐ」を、最初のイは「й（イー）」で後のは「и（イ）」と区別している。文字エについては、ア行の「え」とワ行の「ゑ」の転写を、最初のエは「е（イェ）」で、後のエは「э（エ）」で区別している。日本語「を」については、（唇音性の転写のために）［wo］で転写している。A.タタリノフはオメガ以外の、ロシアの一般のアルファベットをすでに用いている。音節シとセの転写は英語「sh」の子音や音節転写のように「ши」「ше」が用いられ、上記は東北方言の方言での発音方言を反映している。「は、ひ、ふ、へ、ほ」音節は「фа（fa）、фи（fi）、фу（fu）、фе（fe）、фо（fo）」で転写、――これらは、特に東北の秋田県の方言に見られるように、ヨーロッパの言語のような唇音ｆを反映している[14] [v]。それ以外の場合については、『レキシコン』の「いろは」の転写とスパルビン（Е. Г. Спальвина）教授[vi]が20世紀90年代に開発した方法とは転写法が少し異なる。

「いろは」は英語のように有声子音音節を表さないが、それらの転写について、『レキシコン』の場合を説明する。

日本の徳川時代においては、非常にまれなケースを除いて、平仮名で書かれた和文には子音の「濁り」（すなわち「濁音」）を表記することはない。濁音符号が行われたのは、例えば、５枚目表「かば

[14]　原注14　橘正一、東条操、国語方言学、本州東部の方言、東京、1934年、８ページ。

のき（=kabanoki 白樺）」、16枚目表「をぼいてますか（=oboidemaska それを知っている？）」、31枚目「つぼ（=tsubo 木立）」、38枚目「かばりしました　（=kabarishimashta 溺れました）」、41枚目の裏「かば（=kappa[15] 地獄）」。これらすべてのケースで、濁音はバ行有声音節のみ、すなわち、ba、bi、bu、be、boであることは興味深い。

青森、秋田、山形、岩手、福島、宮城の、六県で話されているのが東北方言である。これらの方言では音声一般や語彙・文法的な特徴で共通し、日本全国の音声や文法・語彙の面で日本の他の地域の方言から区別される。アンドレイ・タタリノフの『レキシコン』は、ロシアにおける日本学研究者だけでなく、日本方言の歴史的な面において日本の方言研究者にとっても大変面白いものである、それはこれらの方言の音声特徴がロシアで転写された最古の記録であるためである。日本の方言は、前世紀の80年代に東北方言を記録、研究するために始まったが、A.タタリノフに編纂された『レキシコン』はそれより百年以上も前の東北方言を反映していて、次のような音声特徴が見られるのである。

１．日本の方言の研究によると、ア母音・オ母音・イ母音は、標準的な発音と東北方言で違いはない[16]。一方、イとエの母音の発音は標準語と非常に異なっている。東北方言ではイとエの母音は互いに交換、混合される。『レキシコン』は、このような現象は、例えば次のように反映される。

まいたり（=maidari）　標準語形「まえだれ」（=maedare）エプロン（「запанъ」はシベリア方言[vii]）

かまのまい（=kamanomai）　標準語形「かまのまえ」（=kamanomae）囲炉裏（ロシアの炉の口の前にあるエリア）

あすぶ（=asubu）=「楽しい」、標準語形「アソビ」（=asobi）

まなく（=managu）=「目」、標準語形「マナコ」（=manako）

ふくるとり（=fugurutori）=「フクロウ」、標準語形「フクロウ」（=fukuro）

つもこりかぜ（=tsumogori）=「旋風」、標準語形「ツムヂカゼ」（=tsumdzikadze）

てかいとくろ（=tegai Toguro）=「高い場所」、標準語形「トコロ」（=tokoro）

ばんとくろ（=bantoguro）=「衛兵詰所」（これは方言）

きんくわします（=kinkwa Shimas）　標準語形「けんかします」（=kenkasimas）　戦い（喧嘩）

おまい（=Omai）　標準語形「おまえ」（=omae）あなた

２．山形県の方言にはeとiの中間母音の方言で ie がある。この母音は『レキシコン』の転写に反映されていて、「さけ（酒）」（=ワイン）を「сагэ（=sagie）」と転写、「け（毛）」（=ウール）を「кей（kei）」と転写している。

３．山形ではjuはしばしばに jo に交替して言われる（およびその逆も）。この現象は『レキシコン』

---

[15] 原注15　転写では「kappa」という正しい発音を示している。

[16] 原注16　なお、東北地方の一部の方言においてオがウに任意に交替すること（その逆も）があることが『レキシコン』で見られる。

に反映されている。たとえば、よみ（iomi）=弓、標準語形、ゆみ（yumi）。

４．すでにいろは転写の分析に示したように、東北方言ではもともと唇歯音ｆであった。こうして音節は、ひ、ふ、へ、ほ、ha、hi、fu、he、hoではなく、明らかにfa、fi、fu、fe、foであったことが『レキシコン』の転写に反映している。

はな фана（=fana）　鼻　　標準語語形 хана（=hana）

ひけ фиге（=fige）　髭　　標準語形 хигэ（=hige）

ひほ фибо（=fibo）　紐　　標準語形 химо（=himo）

ひたり фидари（=fidari）　左　　標準語形 хидари（=hidari）

ほし фоши（=foshi）　星　　標準語形 хоси（=hoshi）

この音声は1604年に長崎で出版、ポルトガル語による転写のなされたロドリゲスの文法書[17]によって記録されていて、例えば「母」という単語は「fawa」と転写されている。1516年に出版の謎々集[18]に以下の謎がある。

母には二度あひたれども父には一度もあはず[viii]

「母」（という語）には二回会うけれども、「父」（という語）には決してあわない。こたえ――唇。東京の現代発音では「母」は「haha(xaxa)」であり、「母」の発音では唇が一度も閉じない。したがって橘正一・東条操は16世紀の標準日本語の発音としては明らかに「fawa」であったと結論づけた[19]。イルクーツクの学校の先生による18世紀のロシア文字転写による36枚目表の「фафа(fafa)」表記[ix]は、日本語が唇歯音ｆであったことを反映している。後者は、日本の方言において歴史的な等語線の構造の面で非常に興味深い。

５．秋田、青森、岩手県では「ひ(hi)」はしばしば「ふ(fu)」と発音される（およびその逆も）。これは、A.タタリノフの転写で『レキシコン』の日本語に反映されている。

ふとつの втозъно（=vtozno）　　標準語形「ひとつの」хйтоцуно（=hytotsuno）

ひる хиру（=furu）にんにく　　標準語形「ひる」хиру（=firu）

ひなかた фнагата（=fnagata）船乗り

ひちちり фужнчйри（=fuzhnchyri）肘　　標準語形「ひぢ」хидзи（=hidzi）

６．東北方言では有声子音の前で鼻音化する[20 x]。この現象は東北６県すべての方言に共通である。ラテン文字では文字の上の～で転写するが、日本の鼻音化の転写では、この鼻音の挿入は、鼻音化母音文字の後にンで表示される。タタリノフは鼻音化母音の後に鼻音文字м（ム）[xi]またはн（ン）を挿

17　原注17　橘正一・東条操、国語方言学８ページに引用。

18　原注18　注17と同じ。８ページ参照。

19　原注19　同上８ページ参照。

20　原注20　ポリワーノフ（Е.Д.Поливанов）は、これを解釈して、b、d、g（mb、nd、ng）の閉鎖音の前位置に、前わたりの鼻音があると考える。（Е. ポリワーノフ『日本語言語学論集』モスクワ、27～29ページ）。

音声学者や日本の方言学者東条操・橘正一はこの音声現象の観点に従っている。

入している。この鼻音化は日本語単語の綴りに示されている。

てむぶくろ тембугуро（=tembuguro）「手袋」　標準語形は「テブクロ」тэбукуро（=tebukuro）

ひなとむ фнадому（=fnadomu）「釣具」　標準語形は「船道具」фунадогу（=funadogu）

うむば умба（=umba）「おばさん」　標準語形は「おば」оба（=oba）

ひんとろ биндоро（=bindoro）「ガラス」　ポルトガル語「ビードロ」vidro（=vidro）

うさんき усанги（=usangi）「うさぎ」　標準語形「うさぎ」усаги（=usagi）

いちんこ ижинго（=izingo）「いちご」　標準語形「いちご」итиго（=itigo）」

７．東北方言では語中尾のカキクケコ、タチツテト（ka、ki、ku、ke、ko、ta、chi、tsu、te、to）はすべて有声子音になる。しかし、それらの前には鼻音がない。また『レキシコン』のロシア転写では以下のように記載されている。

ほとけ фодоге（=fodoge）「神（仏）」　標準語形「ほとけ」хотокэ（=hotoke）

をやかた оягада（=oyagada）「親方」　標準語形「おやかた」ояката（=oyakata）

はと фадо（=fado）「鳩」　標準語形「はと」хато（=hato）

みち миджи（=midzi）「道」　標準語形「みち」мити（=miti）」

まつ мазу（=mazu）「松」　標準語形「まつ」мацу（=matsu）

なつ назу（=nazu）「夏」　標準語形「なつ」нацу（=natsu）

わた вада（=wada）「綿」　標準語形「わた」вата（=wataコットン紙）

てかいところえあてさしやれ тегай тогороe адесашаре（=tegai togoroe adesasyare）

「我慢する」прложи выше[xii]

あてとこ адэдого（adedogo）　比喩的に「目標」　標準語で「あてとこ」атэтоко（=atetoko）

８．仙台方言の音節「せ　ʃE」と「ぜ　ZE」は、標準語の発音の音声「し(i)」「じ(i)」のように摩擦音シュー音で、これと同じように『レキシコン』ではたとえばセを「ше」、ゼを「дже」に転写する。

せせす шешезу（=sheshezuしばしば）　標準語形 サイサイ сайсай（=saisai）

しやくせん шагушенъ（=shagushen借金）　標準語形 シャクセン сякусэн（=syakusen）

しやわせ шияваше（=shiyawasye幸福）　標準語形 シアワセ сиавасэ（=shiawase）

せんかんちやうしるひと дженъканъжо ширувто（=dzen'kan'jo shiruvto計算係）

標準語形 ゼニカンヂョウヲ　スル　ヒトдзэнкандзё-о сиру хито

せき шеги（=shegi）「渓流」　（「渓流」を「セキ」というのは方言）

９．東北地方の方言では音節において母音が消失するのは次のとおり。キクシスチツヒフ ki、ku、si、su、ti、tsu、hi、fuのあとに、カケコサセソタテトka、ke、ko、sa、se、so、ta、te、toが続いている場合。キクシスチツヒフの音節のあとにキクシスチツに続く場合、母音消失は発生せず、有声音になる。次のようである。

くさい ксай（=ksai）「臭い」

したてにん штаденин（=shtadenin）「仕立て屋」

つかまいました цкамаимашта（=tskamaimashita）「つかむ」

した шта（=shta）「下」

くつ кузу（=kuzu）「 靴」

ひきやく хкягу（=hkyagu）「使者」

てふき тефги（=tefgi）「ナプキン」

ふくろ фугуро（=fuguro）「 袋」

さしき зашиги（=zashigi）「座敷」

しつかな шизгкана（=shizgana）「穏やかな」

10. キク ki、ku、チツ ti、tsuは母音に続くと有声音にならない。

ゆくさ юкша（=yuksha）「試合、戦争」

あつい ацуй（=atsui）「暑い」

11. 興味深いことに、Е. Д.　ポリワーノフが指摘[21]したように、もともとは中国語の影響を受けて起こった唇音化現象である軟口蓋合拗音kw、gwが日本語の和語にも影響をあたえ、東北方言で非常に安定して行われていることが『レキシコン』によって証明された。

くわんのん Кваннон（=kwannon）「仏教のパンテオンの神」（божество буддийского пантеона）

をきたいくわん окидайгван（=okidaigwan）「都市国家」（городо дер жавец）

くわいしやう квайшо（=kwaisyo）「７事務所」（канцелярия）

くわいしやう квайжо（=kwaijo）「判決」

くち квужи（=kwuji）「口」

くいとこさる квито гозару（=kwito gozaru）「食べたい」（исть хошу）（これはシベリア方言）、「есть хочу」のこと。

くいません　квуймашен（=kwuimasyen）「食べない」

くまりました　квумаремашта（=kwumaremashta）、「морошно」（これはシベリア方言）、「曇り（облачно）」のこと。

くし　квуши（=kwushi）「櫛」

このように、A.タタリノフのロシアの転写は18世紀における東北方言の音声を十分に完全かつ正確に反映している。

文法的な機能については、我々は『レキシコン』で示された内容から少しのことを言うことができる。

１.『レキシコン』の現在と過去形動詞の活用形が提示され、標準語と同様、接尾辞は、マス（мас）、マシタ（машта）、否定形マセン（масен）である。

[21] 原注21　Е. Д. ポリワーノフ「日本語における子音の諸カテゴリー」34ページ。

むすびました мусубимашта（=musubimasta）「結ぶ」

なきました нагимашта（=nagimasta）「放り投げる」

まちていました мадімашта （=madimasita）「待つ」

あめふります аме фуримас（=ame furimas）「雨が降る」

ててありきます деде　аригимасъ（=dede arigimas）「歩く」

みます мимасъ（=mimas）「見る」

みました мимашта（=mimasta）「見た」

はしめます фашмемас（=fasmemas）「始める」

ぬいます нуймасъ（=nuimas）「縫う」

あすびます асубимасъ（=asubimas）「散歩する」

くわいません квуймашенъ（=kwuimashen）「食べない」

のみません номимашенъ（=nomimashen）「飲まない」

やりました яримашта（=yarimasta）「与えた」

やります яримасъ（=yarimas）「与える」

興味深いことに、これらの形式は日本語の文語や丁寧なスピーチの特性であるが、18世紀のA.タタリノフ『レキシコン』によって、1896年のいわゆる市民革命[xiv]よりずっと以前に、話し言葉において日本とロシアの交渉の場で一般的に使用されていたことがわかる。

２．動詞の命令形の表し方には、まず第一は動詞の基本形に接尾辞シャレが接続するもの、第二、第三には動詞の活用形に接尾辞サシャレが接続するものがある。

ぬすばしゃれ нусубасьшаре（=nusubas'syare）「盗め」

わき　いかしゃれ ваги игасьшаре（=wagi igas'syare）「外に行け」

あらわしゃれ аравашаре（=arawasyare）「洗え」

たつねさしゃれ　тазнесашаре（=taznesasyare）「探してくれ」

あけさしゃれ　агнсашаре（=agesasyare）「あげてくれ」[xv]

これらの接尾辞の起源は何かは不明であるが、いずれにしても、動詞命令形にはそれらの接尾辞が不可欠である。禁止の形式は、標準語と同様にシャレ、サシャレに接尾辞ナが接続して形成されている。

わりくゆわすしゃるな варйгу ювасшарна「悪口を言うな」

よますしやるな іомасшарна「読むな」

３．現代日本標準語で採用され、口頭語でもちいられるデスの代わりに、『レキシコン』では古風な言い方であるデゴザリマスがたくさん使用されている。東北仙台方言では現在でも残っている。

のといとこさる нодо идо гозару（=nodo ido gozaru）喉の痛み（喉が痛いです）

ほしこさるфоший гозаръ（=hoshii gozaru）

「хощу」現代の標準語では「хочу」、ほしいですхосий дэс（=hoshii des）

ほしこさるか фоши гозарука（=hoshi gozaruka）

「хощешь ли」現代標準語では「хочешь ли」ほしいですか хосий дэс ка（=hosii des ka）

４．『レキシコン』では現代日本語からは逸脱している名詞の格変化がある。たとえば、主格表示がないものがある。

なりかみなります　наригами наримасъ（=narigami narimas）「雷が鳴る」

標準語では「каминари-га наримас」（=kaminari-ga narimas）

のといとこさる нодо идо гозару（=nodo ido gozaru）「喉痛い」

標準語では「нодо-га итай дэс」（=nodo-ga itai des）

移動の方向はエの代わりに接尾辞サを使用する。サは日本方言と同様に与格場所にも使用される。同じ接尾辞によって与格の場所を表すのである。『レキシコン』にはそのような例が多くはないが存在する。

イつあのひとこくのむらさきまし izy ановто когоно мураса кимашта

（=izu anovto kogono murasa kimasta）「いつ彼はこの町に到着したか」（45枚目）

киканайде догоса демо гймашенъ（=kikanaide dogosa demo gimasyen）「許可なくどこへも行けません」（46枚目　平仮名は書かれていない）

『レキシコン』はロシア語語彙から日本語への翻訳がなされたので、たくさんの日本語の単語を用いてロシア語の単語の意味を明らかにするように編集されている。例えば次のようにである。

「беспомощный」（頼りない）－「тезыдай гозаранай」（てつたいこさらない）とあるが、「てつたい」は「援助」、「こさらない」は「利用できない」の意味。

「всемогущество」（全能）－「минна кошрайгодо」（みんなこしらいこと）とあるが、「вседелание」（総てすること）の意。

「вечный」（永遠の）－「маго мазтайе」（まこまつたい）とあるが、「Желающий ожидать внуков」（孫のために）の意。

「вежливый, учтивый」（丁寧、礼儀正しい）－「жоозыни жигя шимасъ」（ちをつにちいきします）とあるが、「искусно делает поклон」（巧みにお辞儀をする）の意。

「мыло」（石鹸）－「акаодотя」（あかをとし）とあるが「あか」は「грязь」（土）、「おとす」は「削除する、出す」の意。したがって「泥おとし」の意。

「пивоварня」（醸造所）－「нигорясакинирудоко」（にこりさきにるとこ）とあるが、「место варки мутного сакэ」（濁った酒を料理する場所）の意。

「сапожник」（靴屋）－「фагимоно цугуру вто」（はきものつくるひと）は「человек, изготовляющий обувь」（靴を提供する人）の意。

日本では東北方言に関しては非常によく研究されている。東北六県すべての方言辞書があるが、と

はいえ『レキシコン』はまだ非常に興味深い。A.タタリノフ『レキシコン』に掲載された日本語の語彙を考察すると、我々はそこには古代にまで遡る地層を発見する。家畜、鳥や動物の名前は、この点で興味深い。

１．雄牛「こてうし」（=kodeushi）。この語は古代語を掲載している10世紀の古辞書『倭名類聚鈔』に載っている。この単語は『日本書紀』『万葉集』にあり、現代方言にも多くの音声バリエーション――коттои、коттэ、котэ、коти、коцу、коццу（コットイ、コッテ、コチ、コツ、コッツ）――で存在し、秋田県ではкотэ（=kote コテ）と発音し、『レキシコン』では「コデウシ」（=kodeushi）とある。橘正一[xvi]は、古代では一般的に日本のすべて「コットイ」を使用したが、江戸時代に新語「ヲウシоуси」（=ousi）になり、最近になって全国に広がったが、ただ辺境地域において昔のままに用いられていると述べた。『レキシコン』がその「コデウシ」（=kodeusi）を掲載しているのは、これらの単語が派生し、互いの関連を示しているである。

２．種牡馬「こむま」（=koma）。また古辞書『倭名類聚鈔』に「駒音倶古万子也」と記載されていて、当時は「子馬」の意味だった。それは長く用いられるあいだに「種牡馬」という技術的な用語として確立した[xvii]。

３．雌馬「たうま」（=dauma）。『倭名類聚鈔』は「駄負物馬也」として「荷馬」として解釈している。種牡馬は、兵士たちのために乗る馬として使用されたので、牝馬は必然的に貨物の輸送のために荷載せする方法に用いられた。その結果、時間をかけて「牝馬」が「ダウマ（駄馬）」という意味で定着している[xviii]。ダウマは典型的な仙台方言である。

４．非常に古い言葉「をとこわらし」（=odogo Varashev）「少年」の意、「をなここわらし」（=onago Varashev）「少女」の意もある。これらの言葉は、ワラス、ワラベvarabe、ワラシベvarasibeといった異形態があり、仙台方言の特徴である。日本古来の言葉では「わらは」（=Varava）は、10歳までの男女の子供の一般的な名前だった。『土佐日記』（935年）、『源氏物語』にもみられる。おそらくワラハは「ヲトコワラシ」「ヲナゴワラシ」の両方の方言を遡る語であろう。

５．「Болото」（沼）に「язи」（=yazi）[xix]

「колодец」（井戸）に「язи」（=yazi）。

橘正一の文章「井戸の方言」（ido-no-hogen）[22]という文章は、「井戸」について、日本の様々な方言の名称を調査した非常に興味深い報告である。彼は、さまざまな方言で「井戸」の名前の54のバリエーションを収集したが、すべてのこれらの実施は、西日本方言であり、東北方言や日本の中央である関東地方の方言のものではない。

橘は非常に興味深い観察を行った。日本は、海に四方を囲まれて、ほとんどどこでも新鮮な水の深刻な不足を経験している。春に深い山の川も夏には干上がってしまう。我々は今、水の水路の不足を補う場合、非常に遠隔地からしばしば水を供給する。むかし古い日本の水の供給がなかったとき、人々

[22] 原注22　橘正一『方言讀本』、東京、1937年、125～147ページ。

は厳しく水の不足に苦しんだ。これは、「井戸」のさまざまな方言名に反映されている。井戸は、河川の枯渇が原因で水不足のために掘られた地域では、川の名前――カワ――が自動的に「井戸」の名称に切り替えられた。例えば、игава（井川）、идогава（井戸川）、кумигава（汲み川）（「クム（куму）は「すくう」の意）、цубогава（壺川）（ツボцубоは「瓶」の意）、цуригава（吊川）（ツリцуриは「吊る」の意）で命名された。雨水を集めて池にした地域では自動的に「井戸」の名称として用いられ、そこでは「イケ（池）」、「イケド」、「ツツ池」などと命名された。その井戸の源として「泉」が用いられた場合は「井戸」は「イズミ（泉）」「イズム」と命名された。上記のようにしてみると、東北地方方言で「ヤチяти」（=язи）が「井戸」や「沼」を表す理由は明らかになるであろう。ヤチという語はアイヌ語から借用したが、この場合には上記と同様に、何を利用して「井戸」とするかという機能の転移からの命名があった。「沼」を利用して「井戸」とすることが近代の東北方言語彙でその可能性があり、しかしそれが18世紀の『レキシコン』で固定されたまま保存されているのである。

『レキシコン』には、アイヌ語がいくつか含まれている。本州北東部の日本人船員たちは明らかにアイヌの人々との定期的な接触を持っていた。たとえば、次のように。

ножик（包丁）－　магири（マキリ）

корыто（谷、溝）－　кицу（キツ）[xx]

ковшик（大さじ、スコップ）－　фиягу（ヒヤク）などなど。

『レキシコン』のロシア語では、シベリアなどの遠隔国境地域の地方貴族の方言の特徴を反映している。それは洗練された読み書き能力と同時に俗語の使用という書きぶりによって特徴付けられる。もし『レキシコン』辞書が、サンクト・ペテルブルクやモスクワで編纂された場合、多くのシベリア方言はもちろん存在しないはずである。

беглой（重労働によって逃亡すること）　зверует（毛皮動物の狩猟に従事する）

запан（エプロン）　заплот（柵）　лопать（衣類）　лапасть（足首）

морошно（曇り）　доскань（嗅ぎたばこ）　синея（鎖）　тамарь（先端に歯のついた矢）

тесла（手斧）　фанза（中国の絹織物）　цыганить（笑う）　черепан（陶芸家）などなど。

『レキシコン』の単語で目立つのは、海洋関係の語彙である。ヨット、ボート、網道具、elbot（捕鯨船）、水夫、港、小型ガレー船、コンパス、船、マスト、舵、船員、水先案内人、羅針盤、北、東、棍棒（バナー）、碇、ボート、重りなど ――このことは『レキシコン』が海軍学校の学生に用いられたことを示している。

日本の東北方言の言語を記録しているだけでなく、18世紀の東北方言をロシア語で転写してあり、それらの音声形式も記録してあるのがA.タタリノフ『レキシコン』なのである。一般科学の見地から、ロシア東部での辞書編集の歴史の面から、興味を呼び起こす。『レキシコン』はアジアの言語に翻訳され、ロシア語で書きとどめられた最初の語彙集の一つである。この論文は『レキシコン』に記載された言語的な事実すべてを明白にしたことを主張しない。この論文は今後の研究のための序論である。

我々の目標はA.タタリノフの著作、それが書かれた状況の一般的な知見を読者に与えることなのである。

Ｏ．ペトロワ

---

[i] 実際はабвгдежзикрмнωпрстуфхцчщя、会話、イロハ、月日、数字、貨幣単位、人数。

[ii] 原注11の言うようにё、й、щ、э が抜けていて見出し頭字は25文字である。

[iii] ペトロワは本文のように前半部（Война будет вредна.）を読むが、実際は「война есть людемь вредна」と書いてあると思う。

[iv] 現代語では使用しない「ω」（オメガ）文字があり、このような但し書きをつけ、（　）でくくったと思われる。

[v] 橘正一・東条操1934『国語科学講座』Ⅶ、「国語方言学　本州東部の方言」明治書院。原注17・18も同様。

[vi] ウラジオストック東洋研究所で日本語を教えた。1900年にキリル文字による日本語のかな転写法を考案した（ロシア版ウィキペデアВикипедия「Русские транскрипции для японского языка」による）。

[vii] 15裏「заранъ　майдари　まいたり」とある。この「заранъ」がシベリア方言であるという意味である。「зарах」は「衣服の裾、かき合わせ」の方言形。

[viii] 「なそたて」（1516年『後奈良院御撰何曾』）所収（鈴木棠三編『中世なぞなぞ集』岩波文庫）。

[ix] 36表「теща　шудоме　фафа　しやうとめ　はゝ」とあるを指す。

[x] ポリワーノフの論文は村山七郎訳『日本語研究』弘文館1976の「日本語における子音の諸カテゴリー」。

[xi] 原文では「и」になっているが、前稿でも述べたように以下の用例「てむぶくろ」「ひなとむ」「うむは」と合わないのでｍ（ム）に訂正する。32表「тембугуро（てむふくろ）」、34裏「фнадому（ひなとむ）」37表「умба（うむは）」。

[xii] ７表の例文と思われるが読み間違いがある。「выше　положй」に対して「тегай　когорое　агесашаре　てかイこゝろ江　あけさしやれ」と書いてある。「より高く努力を傾けよ」に対して「高い心へお上げなさい」の意味と思われる。

[xiii] 10裏の用例。ペトロワは「まちていました　мадімашта」と読む。しかし、「маді」の部分は、８裏「город　мура：шйро　むら　しろ」の「город」例と同様に「д」が上に添えられているとみるべきで、「мадде（マッデ）」と読むのではなかろうか。

[xiv] 「明治維新」を指すと思うが、年代が合致しないので不審。

[xv] 27裏の用例は「агесашареあけさしやれ」である。

[xvi] 橘正一・東条操『国語方言学　本州東部の方言』による。『国語科学講座』Ⅶ、明治書院、1934年。

[xvii] 橘正一『方言讀本』厚生閣、1937年。

[xviii] 橘正一『方言讀本』167ページに「男馬は軍馬として使はれ、女馬は荷負馬として使はれるから、自然、駄馬といへば、女馬を指す様になツたのである」とある。

[xix] 前掲注xiiiで述べたように、「д」が上に添えられていると読むべきで、4表「боротъ　яджи　やち」、18裏「кородезъ　ядзи　やち」である。正しくは「яджи」（=yadzi）。

[xx] タタリノフ原文では正しくはкитцуとあるので「キッツ」。

付記

本稿は江口泰生「ペトロワの『レキシコン』研究について（前）」（2013年12月発行『岡山大学文学部紀要』第60号）の続篇である。また本稿は平成21年～平成24年度文部科学省科学研究費補助金、基盤研究（C）「ロシア資料の文献方言史学的研究」（課題番号22520468）の支援を受けたものである。青森県下北市佐井村の渡邊隆一氏、長福寺ご住職ご夫妻に記してお礼申し上げる。

（えぐちやすお　岡山大学大学院社会文化科学研究科教授）